

素うどん

私が中学生の頃、母は小さな食堂を営んでいた。テーブルが四つ位あって、網戸で仕切られた狭い厨房があるだけの、本当に小さな店だった。奥には六畳ほどの部屋があり、母はそこに寝泊りして、暇を見ては家に帰る毎日だった。高校受験を控えていた私は通学の便利さもあって、そこから学校に通うようになって行った。

母が特別、料理上手だったとは思っていない。もちろん、母の味で育ったのであるから私のお手本であることに間違いはないのだが、それ以上に料理が好きで楽しそうにしていたことを憶えている。厨房には三つの大鍋があつて、煮込んだおでんと、和風、中華風のだしがそれぞれ用意されていた。門前の小僧ではないが、私も自分が食べる分なら、鍋焼きうどんやチャンポンくらいは作れるようになっていた。

あの日は土曜日だったのだろうか、学校を昼過ぎに終えて帰ってきた日のことだ。

その日は店に鍵がかかっていて、私は裏口から入り、うす暗い部屋で着替えを済ませた。引き戸を開け、ひざ丈ほどの段差を降り、つかいで店に出た。お昼時を終えて、母は買物にでも行ったのだろうか。いつ帰ってくるか分からない母のために、表の鍵を開け、テレビを点けて待つことにした。しばらくして、表の引き戸が開く音に、私は振り向いた。入って来たのは母ではなく、一人のおじいさんだった。

「素うどんひとつ：」

おじいさんはそれだけ言うと椅子に座り、テレビを観始めた。私が留守番中の中学生だということに気が付いていないようなのだ。その頃の私は背も高い方で、がっしりとした体格をしていたから大人に見られたのかもしれないが、昼時をとうに過ぎ、食事をとっていないおじいさんには、それが誰であろうと関係なかったのかも知れない。

私は色々と断る理由を考えた。いや、断る理

由ははっきりしているのだから、それをどう説明するかを考えた。そして、結論を出した
(素うどんを作る方が簡単だ)

私はお茶をいれ、おじいさんに差し出した。
厨房に入り、素うどんを作り始めた。今で言うかけうどんである。お玉で小鍋にだしをすくい入れた。沸騰する間にかまぼこを切り、ネギを刻んだ。うどん玉をほぐし入れ、いつも自分用に作っている味に仕上げた。迷いはなかった。素うどんをおじいさんのテーブルに運び、何食わぬ顔で厨房に戻った。緊張はしたが、達成感の方が大きかった。今さら、私が中学生であることを明かす訳にはいかない。絶対にばれてはいけないのだ。

ところが、そこへまた新しいお客が入って来た。今度は母の妹にあたる叔母だった。二人の様子を見て、叔母は全てを理解してくれたのだらう。

「こんにちは」というなり、側の椅子に腰かけて、黙ってテレビを眺める振りをした。私

にはそんな風に見えた。

(見られてしまった)

私は悪さでもしたかのように、少し後ろめたい気持ちになっていた。叔母が母のことを訊いたりしたら、私の立場がおじいさんに分かってしまう。おじいさんは、中学生が作った素うどんを食べさせられているのだ。けれども、叔母は何も話さなかった。黙って、当たり前のように座っていた。

おじいさんは素うどんを食べ終わり、お代を訊いて財布を取り出した。叔母が見ている前で、私はお金を受け取りお礼を言った。そして、おじいさんが椅子から立ち上がり帰ろうとした時、

「お味はどうでしたか。」

叔母が始めて口を開いた。

「おいしかったよ。」

おじいさんはにこにこしながら答えてくれた。こうして、私の初めてのお客様は帰って行った。

「おいしかったって。」
叔母はおじいさんの言葉を繰り返し、私に伝えてくれた。

まもなくして、母が帰って来たのだが、私は奥の部屋に入ってしまったので、二人がどんな会話をしたのかは知らない。けれども、おじいさんが「おいしかったよ。」と言ってくれたことだけは母に伝わっていて、私はまた、それを聞くことができたのだった。

私は今でもうどんが大好きなのだが、家ではほとんど作らない。あの頃ほど、味に自信が持てないからだ。

あの日、おじいさんに出した素うどんは、私を見守ってくれた大人達がおいしく仕上げてくれたのだと私は思っている。そのおかげで、私はうどんが大好きなまま、大人になることができたのだと、おだしを飲み干しながら思うのだ。